

現代資本主義と資本輸出

清 水 嘉 治

現代経済学叢書

17

新 評 論 版

著者紹介

清水 嘉治

しみず よしはる

1929年 茨城県に生まれる。

1955年 一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。

現在 関東学院大学経済学部教授，経済学博士。

専攻 経済政策論，世界経済論。

主要著書 『帝国主義論研究序説』有斐閣，1965年。『経済政策の理論と現実』中央経済社，1967年。『現代イギリス資本主義論』日本評論社，1971年。

主要共著 『経済学の歴史と理論』新評論，1965年。『日本経済政策の展開』中央経済社，1966年。『経済政策演習』新評論，1966年。『京浜公害地帯』新評論，1971年。その他。

訳書 V. パーロ『軍国主義と産業』（共訳）新評論，1967年。その他。

住所 〒221 横浜市神奈川区三ツ沢下町21—5—301

現代資本主義と資本輸出

1973年5月15日 初版第1刷発行

1974年3月31日 初版第2刷発行

1975年3月31日 初版第3刷発行

著者 清水 嘉治

発行者 二瓶 一郎

発行所 株式会社 新評論

〒160 東京都新宿区戸塚 2-1053

電話東京(202) 7391番
振替 東京 113487番

落丁・乱丁本はお取替えします

印刷 白鷺舎印刷工業(73)
製本 鬼原製本所

© 清水嘉治 1973年

(検印廃止)

Printed in Japan

3333—331017—3177

まえがき

現代資本主義、それは現代の巨大な怪物である。この巨大な怪物をどうとらえるかが、われわれの課題である。多くの経済学者は、この怪物に挑戦してきた。わたくしもそのひとりである。挑戦しては後退し、後退しては、また挑戦しているひとりである。最近、怪物の正体もどうやらわかってきた。この怪物の手、足はだいぶ弱ってきたようである。だが胴体は、まだ強靱性をもっている。この強靱性の秘密はなにか。従来の経済学の武器をもって、この秘密を明らかにすることが、いまきわめて重要である。

現代の巨大な怪物は、戦後いくたびかの危機に直面し、手、足を痛めながらも、その強靱性を発揮している。だが、最近の世界市場の攪乱も、国際的なインフレの進行も、「南北」の格差の進行も、通貨危機の深化もどうやらこの巨大な怪物の仕業のようだ。

こうした怪物の体質、すなわち現代資本主義の体質にメスを入れることが、本書の基本課題である。

周知のように現代資本主義の体質の原型は「古典的」帝国主義にあった。したがって「古典的」帝国主義の体質を理論的に究明することは、現代資本主義の原理的体質、とくにその歴史的性格を解明するにあたって基本的前提であると考えた。本書の第一部、第二部で、帝国主義論研究の方法、帝国主義論史研究の問題、帝国主義段階の資本輸出論、さらに帝国主義段階の経済的・政治的分割の問題および両大戦間期のイギリスの資本輸出の問題に、くみかえし執拗に食いついたのは、そのためである。この場合でも、たえずレーニンの命題ならびに問題提起を吟味しつつ、どのように発展させ、体系化するかを課題とした。

こうした「古典的」帝国主義の理論問題を念頭において、第三部では現代資本主義の対外支配体制の経済的基礎

としての資本輸出の分析に焦点をおいた。第三部の研究論集は、本書の心臓部を形成している。その場合、現代資本主義が、現代帝国主義の運動法則によって規定され、とくにアメリカを中心とする先進国の独占体と金融資本の対外支配体制がいかなる構造変化をしめしたかを主要な課題とした。六〇年代のアメリカを中心とする直接投資の急上昇がどのような性格をしめしているかを、国際独占体による世界市場支配として解明した。さらに戦後の資本輸出の主体が、世界企業にあり、それが多くの国に子会社をもつ巨大資本によって運営され、多角的な経営方式と軍需発注への寄生によって特徴づけられていることを資本の運動に即して解明した。そればかりでなく、一九六〇年代後半から七〇年代にかけて、現代資本主義の抗争が、世界市場とくにEC市場を媒介にしたアメリカ系独占資本と西ヨーロッパ系独占資本との抗争となつて表面化していることを実証的・理論的に解明したつもりである。

以上が本書全体の見取図であるが、さらに各章にわたつて本書の主要な構成と課題を簡潔にしめしたい。

第一部第一章では、旧著『帝国主義論研究序説』（一九六五年、有斐閣）で十分に展開しえなかつた帝国主義論研究の方法論を、レーニン『帝国主義論』の構造分析にもとづいて確定することを課題とした。とくにルジェンコ説の検討を試みながら、帝国主義論体系のなかでの独占の概念を再検討し、さらに独占利潤の法則性を検出することを課題とした。

第一部第二章では、従来わが国でも、きわめて未開拓の研究分野である帝国主義の理論史研究に関する問題提起を課題とした。この場合、一九六七年に、この分野において意欲的な研究書を公刊した、トム・ケンプの所説の再検討を通じて諸帝国主義論の史的性格を解明することを主要な課題とした。

第二部第一章では、従来の研究動向をふまえて『資本論』と『帝国主義論』との方法的関連の共通性と差異性を明らかにしながら、資本輸出論を位置づけると同時に、資本輸出を独占資本主義との関連において、どのような理論的内容をもっているかを究明したものである。とくに『帝国主義論』体系のなかで、資本輸出論はいかなる意味

をもっていたのか、さらに独占資本主義段階における資本輸出の一般理論をどのように構築すべきであるかをしめたものである。

第二部第二章は、帝国主義段階における資本輸出を動脈として形成された国際独占体による世界の経済分割、ならびに帝国主義諸国家による世界の政治的分割の基礎過程の理論構造を説明することを主題とした。ここでは、さらに帝国主義と国際金融、貨幣恐慌の問題にも言及した。

第二部第三章では、従来、帝国主義理論の研究対象から軽視されていた不均等発展の法則の問題を、帝国主義との関連で明らかにし、とくにその歴史的ならびに理論的意義を中心に究明した。

第二部第四章は、帝国主義研究の一環として、両大戦間期のイギリス資本主義にみられる資本輸出の形態変化を明らかにした。この分析を通じて、資本輸出をめぐる当時の先進国間の不均等発展がいかに進化したかを実証的に説明したものである。

以上第一部、第二部の研究は、主として「古典的」帝国主義論、および資本輸出研究の理論的アプローチによるが、つぎの第三部は、現代資本主義論および資本輸出研究の実証的ならびに理論的アプローチによる分析であり、第三部は本書の表題にもとづく研究論集であり、本書の重心をなすものである。

第三部第一章は、現代資本主義の基礎性格を、一九六〇年代におけるアメリカを中心とする国際独占体の世界市場支配に求めて説明したものである。

第三部第二章は、現代資本主義の対外市場支配関係の動脈が、現代資本輸出の性格に体现されていることを、実証的に検討したものである。もちろん問題の性質上、できるかぎり現代資本輸出の理論構築を試みた。

第三部第三章は、E.C.の現地視察をふまえて、現代資本主義の再編成問題としての拡大E.C.の性格を究明した。

「大市場論」、関税、貿易問題、「通貨同盟」、超国家機構の問題、さらに対米、英、日本との抗争関係の問題にも

言及した。

第三部第四章では、六〇年代から七〇年代にかけての日本資本主義が国内においては独占資本中心の市場再編成を展開すると同時に、対外的には商品輸出、資本輸出を媒介に、とくに東南アジアへの積極的経済進出を志向している点に焦点をしばって究明したものである。

以上が本書の主要構成であるが、本書の第一部第一、二章および第二部第四章の原型は『経済系』72・74集（一九六七年三月及び九月）、76集（六八年三月）に、第二部第一章は『経済評論』（一九六七年一月号）に、第二部第二・三章は『新マルクス経済学講座』第二卷（有斐閣、一九七二年）に、『マルクス経済学体系』第三卷（有斐閣、六六年）に、第三部第一および三章は、『エコノミスト』（一九六七年一月七日、七二年一〇月三十一日の各号）に、第三部第四章は『新世界ノート』（一九六九年二月、七〇年一月の各号）に掲載したものであるが、それぞれかなりの加筆訂正をした。研究論集の性格上、部分的には重複をまぬかれなかった。さらに第三部第二章は、本書の刊行を機会に、新しく執筆したものである。なお、お断りしておくが、本書の題名は帝国主義と資本輸出と考えたが、何よりも現代史的視点を重視して表題のごとくにした。

各章とも前述した問題意識のもとにまとめたりであるが、よみかえしてみると、不十分であることを強く反省している。この機会に専門研究者ならびに読者からの厳しいご批判をまつ次第である。さいごになって恐縮であるが、本書の完成にあたって、先学、同僚の方々の研究成果に負うことがきわめて大きい。厚く感謝したい。また出版にあたっては、数年前から好意に満ちた督促をくださった新評論の二瓶一郎氏にたいして心からの敬意を表する次第である。彼の厳しい要請がなかったら本書は陽の目をみることはできなかったであろう。ここに重ねてお礼をしたい。

一九七三年三月三十一日

横浜市三ツ沢ガーデン山にて

清水 嘉治

目次

まえがき	一
第一部 帝国主義論研究の方法 (二九六)	
第一章 帝国主義研究の方法	二
——とくにレーニン『帝国主義論』研究の方法について——	
一 問題の所在	二
二 帝国主義研究の方法	一五
三 ルジェンコのレーニン帝国主義研究の方法について	二六
四 独占利潤の法則性について	三四
第二章 帝国主義論史研究	五九
——トム・ケンプの所説を中心として——	
一 帝国主義論史研究の問題点	五九
二 マルクスと帝国主義の理論	六三
三 ホブソンと『帝国主義論』	七一
四 ローザ・ルクセンブルクと帝国主義論	七五
五 レーニンと『帝国主義論』	九六

六 シュンペーターの「帝国主義論」	三
七 レーニンの「エピゴーネン」と正統派マルクス主義の問題	六
八 こんごの問題	六

第二部 帝国主義と資本輸出論(三二一六)

第一章 資本輸出論の再検討

一 問題の所在	三
二 『帝国主義論』における資本輸出の性格	六
三 「資本過剰」と資本輸出の必然性の問題	一〇
四 資本輸出の本質と形態	一四

第二章 帝国主義と世界の経済的分割

一 帝国主義と資本輸出	一〇
二 帝国主義と国際金融・貨幣恐慌	三〇
三 帝国主義と国際独占体	三八
四 世界分割と不均等発展の法則	三七

第三章 帝国主義と不均等発展

一 不均等発展法則の意義	三
二 世界戦争、危機、革命	五〇

第四章 両大戦間期におけるイギリスの資本輸出……………一五四

一 問題の限定……………一五四

二 両大戦間期の世界資本主義の動揺……………一五七

三 両大戦間期におけるイギリス資本輸出……………一六〇

第三部 現代資本主義と資本輸出（一七～三〇）

第一章 現代資本主義の基本性格……………一八九

——国際独占体の世界市場支配の解明——

一 主要な問題点……………一八九

二 二つの代表的見解……………一九〇

三 資本輸出のメカニズム……………一九七

四 軍事経済との結合……………二〇〇

第二章 現代資本主義と資本輸出……………二二六

一 問題の所在……………二二六

二 六〇年代のアメリカ直接投資の性格……………二二六

三 西ヨーロッパ資本のアメリカへの投資……………二四七

四 国際資本戦争の性格……………二五八

第三章 現代資本主義と拡大ECの性格……………二六四

——「ヨーロッパ合衆国論」の問題点——

一	拡大E Cと「大市场」論	二六四
二	資本の国際的集中	二六九
三	超国家機構は定着するか	二七四
四	拡大E Cとイギリス・アメリカ・日本	二八一
第四章	現代日本資本主義と東南アジア進出	二九〇
	——現代日本資本主義と資本輸出——	
一	なにが問題なのか	二九〇
二	日本経済の六〇年と七〇年	二九五
三	「経済の国際化」と東南アジアへの資本輸出	三〇三
四	東南アジア資本輸出の性格	三一二
五	ベトナム戦争と日本帝国主義の志向	三三八
六	むすびにかえて	三三三

第一部

帝國主義論研究の方法

第一章 帝國主義論研究の方法

——とくにレーニン『帝國主義論』研究の方法について——

一 問題の所在

レーニンの『帝國主義論』（一九一七年初版）は出版されてから、今年で、ちょうど五〇年にあたる。この五〇年間の世界は、戦争と革命を軸にまさにドラスティックに動いた。おそらくレーニンも想像することができなかったであろう。だがレーニンが展開した「資本主義の最高段階としての帝國主義」の本質は、歴史的制約性をもつとはいえ、なお依然として存在している。この点に関する限り、社会科学を研究するものにとって、だれも否定することができないであろう。だが一方、この五〇年間において、帝國主義の実現形態と実現条件は大きく変化している。したがって、ここで改めて、レーニン『帝國主義論』出版五〇年を記念して、その理論的体系化を試みることはきわめて重要な課題となるであろう。⁽¹⁾ 今日、一部の経済学者の間で、帝國主義の本質と実現形態の変化を機械的に分離して論じたり、また両者を同一視して論じたりする傾向があるが、これはあまりにも現象の変化におぼれた結果生まれた偏見であろう。たとえば、現代資本主義はレーニン『帝國主義論』の方法にたよっては分析できないとか、また第二次世界大戦後、かつての植民地・従属国の人民や先進国の労働者・市民の力量を無視して、單純に植民地の独立によって、もはや帝國主義は存在しなくなったとか、先進資本主義諸国は、後進国または低開発国に経済援助にのりだし、もはや世界の福祉政策が定着しつつあるから帝國主義は消滅したとかいった類の現象面の議

論は、あまりにも一面的であらう。それは米・英などの帝國主義政策の論理と行動をみればいかに眞実性をもたないかはすぐに明らかになるであらう。⁽²⁾ われわれの展開する帝國主義論の研究視角は、こうした議論の背景とその本質を原点にもどって再検討すると同時に、『帝國主義論』の方法を確定することにある。もちろん、今日の帝國主義の理論は、レーニンの規定した性格そのものではないことはあたりまえであるが、その本質においてはいぜんとして共通したものをもっているといってもよいであらう。したがって今日、レーニンの『帝國主義論』の現代的課題を論ずることは、きわめて重要な実践的課題であるといつてもよいであらう。わたくしは、こうしたすぐれて理論的で、同時にすぐれて実践的課題については、他の機会にふれてきたし、またこんごより体系的に明らかにしようと考えている。

こうした『帝國主義論』の現代的課題を展開するにあたって、きわめて大きな残された理論的課題は『帝國主義論』の体系化の仕事であらう。すでにわたくしは、この問題の序説的意義づけについては、貧しいながら、『帝國主義論研究序説』（一九六五年有斐閣）で、なかば明らかにしてきた。だがそこでも、「帝國主義論体系化」の仕事は残されている。この問題は、社会科学を研究するものにとってきわめて重要な意味をもっている。この問題に入るために、どうしても確認しておかなければならない問題がある。それは、帝國主義論研究の方法をどのように確定したらよいかという問題である。

わたくしは、前掲書においても『帝國主義論』分析の方法を確定したが、これについて入江節次郎、豊川卓二、種瀬茂の三教授からきわめて鋭いコメントをいただいた。⁽³⁾ それぞれの論点については詳しく答えることはできないが、本章のなかで間接的にとりあげることによって、筆者の考え方を明らかにしたいとおもう。また、本章ではこれまであまり問題にされなかったゲェ・ルジエンコの所説をとりあげて、その問題の本質を検討してみることにする。

つぎに帝国主義論研究の方法の根本問題として、帝国主義の経済的本質が独占資本主義であるというかぎりでの独占分析の方法問題についても明らかにしたいと考えるものである。ともあれ、本章は、帝国主義論研究の方法論についての序説的研究ノートである。

(1) この点についての問題指摘は、拙著『帝国主義研究序説』第一・二章参照（一九六五年、有斐閣）。さらにここで考えられる帝国主義論体系化の主要な構成はつぎのようになる。

I 帝国主義論体系の意義と方法、II 帝国主義論成立の歴史的・理論的背景、III 『資本論』体系の発展としての帝国主義論、IV 経済学批判としての帝国主義論体系の構成、V 帝国主義論体系の構成、(1) 帝国主義の国内支配体制（独占と金融資本の理論構造）、(2) 帝国主義の世界支配体制（独占と金融資本を基盤とした資本輸出の理論構造、植民地体制の論理、国際独占体の世界分割論、列強の領土再分割論）、(3) 独占資本主義の経済法則、a 帝国主義と独占利潤の法則、b 帝国主義と経済政策、(4) 資本主義の最高段階としての帝国主義、a 独占資本主義の歴史法則、b 寄生性と腐朽化の論理、軍国主義、c 国家独占資本主義体制、d 死滅しつつある資本主義、e 帝国主義と不均等発展の法則、(5) 諸帝国主義論批判、(6) 帝国主義と民族問題。

もちろん、こうした構成はひとつの覚え書きの序列をしめすものであり、さらに精緻に構成されなければならない。さらに帝国主義論の現代的課題を考えるばあいに、上記のような構成と同時に、帝国主義の矛盾と全般的危機論、全般的危機と現代帝国主義の問題が理論的に構成されるべきであろう。これらの課題は他の機会に明らかにしたいとおもっている。

(2) 拙稿『『帝国主義論』の現代的課題』中央大学新聞、一九六六年一月八日号を参照されたい。さらに拙稿『資本輸出に関する諸問題』（『世界経済評論』一九六五年四月号）を参照されたい。また、現代帝国主義観についての批判は拙著『前掲書』補論第三章をみられたい。また、われわれにとって帝国主義論を社会学的に還元し、支配・被支配関係の国際的類型として把握される立場（A. P. Thornton, *Doctrines of Imperialism*, 1965）とも無縁である。

(3) 豊川卓二『清水嘉治『帝国主義論研究序説』（静岡大学『経済研究』一五卷一号一九六六年七月）入江節次郎（同志社大）、『エコノミスト』毎日新聞社、一九六六年二月八日号、種瀬茂（一橋大）、『世界経済評論』一九六六年五月号参照。豊川・入江・種瀬の三教授の拙著に対する内在的検討と問題提起には深く敬意を表するものであるが、ここで、問

題提起を要約し、同時にわたくし自身の考え方の方向をしめしてみよう。豊川教授は『帝國主義論』における『五つの基本標識』と『歴史的地位』の総括としての段階」という規定との論理的連関性を明確にすべきであるというが、この点は『序説』第一章、第二章において解明したつもりであるが、改めていえば、「段階規定」と「歴史的地位」との関連について、前者は自由競争の否定Ⅱ独占の理論的性格、すなわち、よりすぐれて段階規定の基軸をしめすものであるが、後者、すなわち「歴史的地位」は、段階規定の史的性格づけである。すなわち「段階」規定は、基本的には資本主義一般を基底にしつつ同時に独占と金融資本の運動を軸心とした新しい質の内実規定をしめすものであるのになしいて「歴史的地位」は、資本主義の生成・発展・没落の歴史的性格をしめすものである。

とりわけ、段階規定については、「生産の集積と独占」の論理をみていただければ、その基本方向は明らかになるであろう。「生産の集積」Ⅱ「生産の社会化と資本主義的所有・資本の集積・集中」Ⅱ「資本主義の基本矛盾の量的発展」Ⅱ「独占体の形成」が帝國主義の経済的本質であり、それは帝國主義を資本主義一般の継承をしめすと同時にそれと区別する質的な新たな段階を画する。つまり自由競争からの独占体の成立は資本主義一般の属性の継続であると同時に、基本矛盾の新たな次元での展開という質的契機を含むものであり、競争という一元的原理に導かれて発展した資本主義が、生産の集積にもとづく高度な発展段階で、その胎内に『独占』の発生と支配という自己否定の原理を包摂することによって、過渡的な歴史、すなわち段階的構成をしめすことによって帝國主義の歴史的性格をしめしうるのである。この点、豊川教授も指摘しているとおりである。また金融資本の概念の規定については、入江教授からも論評をいただいたように、独占利潤の構成要素の「複雑性」にあり、とくに、価値実態Ⅱ内実規定はこんごの課題としてうけとめていた。たしかに豊川教授がいうように、独占資本の内実Ⅱ構造と運動形態の法則を明らかにしないで、その価値実態の「具体的姿態」を追求することは、かえって独占資本と金融資本の「論理的区別」をアイマイにすることになる。この点は反省している。入江教授による『帝國主義論』の範疇・概念・規定は具体的段階的性格をもつものとして、これらの内容づけがあたえられるべきではないかという問題については同感である。だがこの点は基本的には競争と独占の段階構成の論理を明確にすることによって明らかにされるであろう。それは『序説』第二章を再検討していただければ、その真意を理解していただけるとおもふ。また入江教授が疑問にしている「資本論」と『帝國主義論』との関連は、本稿ノートにおいて指摘した点をみていただければ、多少の疑問はとけるかとおもう。この点、改めて厳しい批判をお願いしたい。